

会衆派教会のスピリット

講演	中野 敬一〔なかの・けいいち〕
講師紹介	神戸女学院大学文学部総合文化学科教授 神戸女学院大学チャブレン

自己紹介

こんにちは。私は同志社大学神学部、同志社大学大学院神学研究科博士前期課程を卒業しました。最初に日本基督教団西宮教会で伝道師・副牧師として働き、次にアメリカ・カリフォルニア州パークレー市にある神学校Pacific School of Religion (PSR) の大学院に留学しました。また、同時期にパークレー市に近いエルセリート市にある日系人教会のシカモア組合教会 (Sycamore Congregational Church, U.C.C.) の日語部牧師として5年間働きました。その後日本に帰国して、奈良市にある日本基督教団高の原教会の牧師をして、それから神戸市にある保育者養成校の頌栄短期大学の教員として働き、現在は神戸女学院大学で教員として、また神戸女学院大学チャブレンとして働いています。

長々と紹介させていただきましたが、西宮教会とシカモア組合教会は会衆派の系統にある教会であり、PSRはアメリカの会衆派教会と関係が深い神学校であり、同志社大学と頌栄短期大学、神戸女学院大学はいずれもアメリカの会衆派の海外伝道団体「アメリカン・ボード」と深い関係にある学校です。つまり私は会衆派の大学で学び、その系統にある教会と大学で働いてきたということになります。

それだけでなく、幼少期から会衆派の教会と関係がありました。私の両親はキリスト教信者で教会に行っていました。それがきっかけで私も幼い頃から教会の日曜学校に通い、そのうちに将来は牧師になることを志すようになったのです。高校生の時にどこの大学の神学部に進学するかと考えたのですが、両親や私が出席していた教会が会衆派の系統にある教会であったので、同志社大学の神学部を決めました。もし私が通っていた教会が別の教派、たとえば長老派やメソジスト派の系統にある教会であったら、その教派と関係の深い大学の神学部に行っていたかもしれません。

会衆派教会と組合教会

さて、仏教には「宗派」がありますが、宗派の同義語としてキリスト教では「教派」という用語を使用しています。「会衆派」とはキリスト教のプロテスタントの一派を指します。日本で最初に会衆派教会が創立されたのは神戸で、「摂津第一公会」という名称でした。1874年のことです。今日では「日本基督教団神戸教会」という名前に変わっています。この教会に続いて会衆派の教会が各地で次々に設立され、1886年にはそれらの会衆派の教会が協力して伝道を行うために「日本組合基督教会」という組織が成立しました。

日本組合基督教会は1941年に日本基督教団に統合され、その名称は消滅します。けれども近年までは「日本組合基督教会」、略して「組合教会」という名称が頻繁に使用されてきました。たとえば、「この教会はもともと組合教会の系統にある教会だ」という言い方をする牧師や信徒は少なくありませんでした。私が神学部の学生だった頃にも「同志社の神学部は組合教会の牧師を養成する学校だ」と言われる先輩牧師が多々おられました。近年では「組合教会」はほとんど使われなくなり、「会衆派教会」あるいは「会衆主義教会」という呼び方をする人が主流になっています。

ところで、会衆派教会はCongregational Churchの訳です。congregationは「会衆」と訳されますが、「信徒」を意味しています。信徒とはキリスト教の信者で教会に所属している人を指します。会衆派教会は、この信徒が主体的に活動する教会なのです。教会を運営するのは牧師任せではなく、信徒であるという主張がそこにはあります。そして信徒一人ひとりとは平等であり、教会総会の決議が最重視されます。牧師がトップにいて、牧師の下に長老会のようなものがあって、その下に一般信徒、というピラミッド型の組織ではなく、牧師も信徒の一人であるという考え方をしています。牧師は教会における一つの機能 (function) にすぎないとする考えもあり、平等かつ民主的に運営される教会と言ってよいでしょう。

先に述べた日本組合基督教会という教団組織においても、そこに所属する各個教会には上下関係はありませんでした。会衆派教会の特徴は、経済的にも信条的にも、各個教会の自由・自治・独立を重んじ、それを超える教会的権威は認めないのです。

ちなみに、「会衆主義教会」は、「会衆主義に立つ教会」という意味で、かつての日本組合基督教会に所属していた教会やその関連教会、あるいは会衆主義と関係のある牧師を迎えた教会など、幅広い意味を含んだ呼び方です。

会衆派教会の歴史

ここで、「会衆派教会」、あるいは「会衆主義」は何に由来するのかを確認したいと思います。まず、キリスト教会における立ち位置という大枠で捉えると、会衆派はプロテスタントに属する一派となります。まずここから始めましょう。

プロテスタントはローマ・カトリック教会にプロテスト (抗議) した人々によって設立された教会です。ご承知のように、1517年にドイツのマルティン・ルターによる宗教改革が開始されます。ルターはカトリック教会の司祭であり、神学者でしたが、カトリック教会が発行していた贖宥状に反対してローマ教皇を非難しました。やがてヨーロッパ全土にその改革の波が広がっていったのです。

ルターは「聖書のみ」「信仰のみ (信仰義認)」「万人祭司」を唱えました。これがプロテスタントの三大原理です。

まず、「聖書のみ」の説明をします。ルターは、贖宥状に反対しました。贖宥状というのは、一般的には「免罪符」という名で知られていたお札のようなもので、購入すると煉獄という場所にいる人を天国に行かせることができると宣伝されていました。死後の運命に関心をもつ人々は必死で買い求めましたが、これは酷い話です。ルターたちは、そんなお札のことなどは聖書のどこにも書いていないと抗議しました。聖書が唯一の規範であり、聖書に書かれていることのみを重視するように主張したのです。そして、信徒が制度的教会 (教皇) の定めた教理から自由になって聖書を読むことができる道を開きました。これはたとえローマ・カトリック教会の教皇の言葉であったとしても、聖書に明記されていない内容であれば、それに従う義務はない、ということの意味しました。

つぎに「信仰のみ」です。ルターは金品を差し出すなどの行為によって人が罪から救われるのではないと訴えました。聖書を基にしてイエスを信じることのみで救われると主張したので、この「信仰のみ」というのはその意味です。救われるために支払うものは無いのです。いわばただ (無料) で救われるのです。

最後に「万人祭司」です。これも聖書を根拠とし、すべての信徒が祭司であると主張しました。信徒も祭司 (司祭や牧師などの教職者) と同じように神の御用のために働く者であり、皆それぞれに役割があるということです。ですから、信徒も牧師も同じ立場にあるのです。もちろん牧師には信徒を指導するという役割がありますが、信徒の上に立つものではないのです。

補足をしますと、「聖書のみ」が重視されて従来のカトリックの教えから自由になり、さらに「万人祭司」の原則で個が容認されるようになったことで、さまざまな聖書の解釈が発生しました。その結果、多くの教派が誕生することになりました。

英国国教会とピューリタン

ドイツで起こったプロテスタント運動は、スイスやオランダをはじめ、ヨーロッパ全土の教会に影響を及ぼしました。英国 (イングランド) の人々に対しても同様でした。しかし英国の王ヘンリー8世は、プロテスタントの考え方には否定的で、当初はカトリック教会を支持していました。ところが自身の離婚問題を契機としてヘンリー8世とカトリック教会との関係が悪くなっていきます。そして、ついに英国はカトリック教会から離脱し、ローマ教皇庁の指図は受けない国王を首長とした「英国国教会」が1534年に成立したのです。

そんなわけで、英国国教会はカトリック教会からは分離したとはいっても、形式的にはカトリック教会のままでありました。教皇に代わって国王が教会における権力を握ることになっただけです。それでいて信じる内容については部分的にプロテスタントの考えを取り入れることもしたのです。このような在り方を「中道主義」といいます。それを肯定的に受けとめる人々がいた反面、ある意味で中途半端とも言える状態に不満を抱いた人々もありました。それが「ピューリタン (清教徒)」と呼ばれた人々たちです。彼らは中道主義を批判し、万人祭司を強調して教会の民主化を求めました。

やがて、ピューリタンの人々にも多様な考えが生じるようになり、「非分離派」と「分離派」に分かれました。前者は、英国国教会から分離せず、留まって改革していこうとする人たちで、後者は英国国教会から離れて新しいグループを作ろうと考えた人々たちです。この分離派が後の会衆派教会につながる人々でありました。分離派が花を咲かせたのはアメリカでした。かのメイフラワー号に乗って1620年に新大陸アメリカに移住した人々のなかに分離派の人々が含まれていました。彼らはプリマスに上陸して入植したのです。

ピューリタンの特徴

新大陸にきた人たちの多くはピューリタン、つまりはプロテスタント運動に影響を受けた人々でした。彼らはプロテスタントの思想を受け継いで、それをさらに実質化させようとした。具体的には「聖書のみ」の原則に立ちつつ、一人ひとりが自分で自由に聖書を読むことを重視しました。自由であるということは一見楽なことに思えますが、そうではありません。自由であるからこそ、自分で深く考えることが要求されます。自分で判断し、自らの意志で行動しなければならないのです。神が自分に何を求めておられるのか、自分には何ができるのかを自分自身に向かって真剣に問うことになります。神からの委託に応える責任性 (responsibility) が重んじられたのです。

ただし、自分で自由に聖書を読むという主張には誤解が生じるかもしれないので言葉を加えてください。これは自分勝手な解釈で聖書を読んでよいということではありません。文脈を

無視して読むことは危険な行為です。聖書が記された時代の歴史的背景や当時の思想、あるいは原語の意味などを前提にして読まなければ、聖書が本来伝えようとした内容から大きく逸脱してしまうことがあるからです。聖書学を始めとしたさまざまな知識を前提にしたいうえで、聖書を自由に読むという意味であることを憶えてください。

さて、神が我々に求めておられるのは、自分自身の喜びや幸せだけでなく、むしろ他者のため、隣人のために何ができるかを考えることであると聖書には示されています。non sibiというラテン語があります。「自分のためではなく」という意味です。新島襄先生が学ばれたフィリップス・アカデミーという学校の校章には、NON SIBIと書いてあることをご存知の方もここにはおられるでしょう。これは後にお話しするアメリカン・ボードの宣教師が合言葉のように使用していたそうですが、会衆派教会の思想に繋がる言葉です。

ピューリタンの特徴についてもう少し触れておきましょう。かつて神戸女学院大学におられた岡本道雄院長がピューリタニズムの研究で知られる大木英夫氏の幾つかの著書を参考に、ピューリタンの特徴として①神と人間の「契約関係」を重視、②高い倫理性による生の変革、③社会の変革、の三つを挙げられています（神戸女学院百年史編集委員会編 『神戸女学院百年史各論』 神戸女学院 1981年）。

①について説明すると、神と人間の関係は「契約」によって結ばれていることをピューリタンは重視しました。人間は聖書を通して神の言葉を聴いて神の呼びかけに応えていく努力をし、神はそのような人間のわざを祝福してくださるという関係です。契約ですから、いずれか一方の行為ではありません。ただ神に依り頼むのではなく人間側の積極的な働きが重要視されていることになります。②については、聖書を通して神の言葉を聴き、新しい生き方を探そうということです。それまでの生き方をより良く変えていくことを意味しています。神に喜ばれる生き方の模索ということになるかと思います。③については、ピューリタンは個人の変革だけではなく、社会の変革を求めました。個人のことでなく社会への関心を広げ、何が神の望まれることか、それを考え続けて行動したのです。会衆派はこれらの特徴を受け継ぎ発展させた教派です。

会衆派の特徴

ピューリタンからは会衆派だけではなく、他の教派も生まれました。それぞれ特徴があることをご紹介します。たとえば、長老派やメソジスト派もそうです。日本基督教団神戸教会の前牧師の岩井健作氏は「長老派は信条（creed）、メソジストは敬虔（piety）、会衆派は生活（life）に重きを置く」と指摘されています。ちなみに神戸教会の前身は先述したように、日本で設立された最初の会衆派教会である摂津第一公会です。

岩井牧師は「『信条』の宗教には秩序があり、『生活』の宗教には展開がある」とし、会衆派は諸領域に多彩な人物を送り出して、「生活の宗教としての広がり」があると述べておられます（日本基督教団神戸教会編 『近代日本と神戸教会』 創元社 1992年）。ここで言われている信条とはキリスト教の「教義」と言ってもよいかと思います。教義は重要ですが、実際の生活においてさまざまな問題があり、その生活の現場から問われることが多々あります。そこからの要請に応えようと、教会だけの活動ではなく、実際に社会や経済、教育や芸術、文化、女性、子供など、諸領域で活躍する人が次々と登場するようになります。会衆派教会は、平和や福祉、人権の問題等、いわゆる社会問題に関わるものが比較的多いのです。これは神の言葉に応答するということをより大きく広く展開しようとした結果によるものと考えられます。

このように会衆派の教会は「社会問題」に関わってきたということが大きな特徴と言えます。同志社大学神学部卒業の牧師は社会問題への関心をもつ人が比較的多いのは事実です。これはアメリカでも同様です。会衆派の伝統を引き継いできたCongregational Churchは、現在ではUnited Church of Christ (U.C.C.) という教団に属しています。彼らもアメリカのさまざまな社会問題に取り組み、多様性を重視した発言や行動を続けています。もっとも社会問題に取り組んでいる教団であるという評価も得ており、まさに「生活」に重きを置いた教派であると思います。

アメリカン・ボードの登場

会衆派の歴史に話を戻します。アメリカで大きく花を開かせた会衆派でしたが、時代が移り変わるにつれて移民当初から続いてきた勢いが失われていきます。時代の流れとともに開拓や改革という意識が薄れていったからでしょう。しかし若い世代が中心となって自分たちの理念に基づいた新たな活動を模索するようになりました。その流れで設立されたのが、皆さんもよくご存知の「アメリカン・ボード」(American Board of Commissioners for Foreign Missions) という団体です。1810年にアメリカにおける会衆派主体による海外伝道団体として設立されました。

明治に入り日本の鎖国が解けると、アメリカン・ボードから1869年に日本への最初の宣教師が派遣されました。彼の名はD・C・グリーンといい、神戸で伝道を始めています。翌1870年には、新島襄がアメリカン・ボードの準宣教師として帰国しました。そして1874年には、すでに何度も紹介している摂津第一公会（現・日本基督教団神戸教会）が日本で最初の会衆派教会として設立されました。

ここからはアメリカン・ボードと神戸女学院のことについて話をします。神戸女学院はアメリカン・ボードから派遣されたイライザ・タルカット、ジュリア・ダッドレーという二人の女性宣教師によって創立されました。彼女たちは1873年の3月に来日しました。江戸時代にはキリスト教伝道が禁止されていたが、明治になってもその禁止は続いており、しばらくは切支丹禁令の高札が立てられたままでした。高札が撤去されたのは1873年2月24日です。当時、アメリカのサンフランシスコから日本までは船で約1カ月を要しました。つまり、彼女たちが出発した時には、まだ切支丹禁令の高札が撤去されることは知らなかったのです。最悪の場合は捕まってしまうかもしれないという危険を感じながらも日本にキリスト教を伝えようとしたことに私は感動しました。

実際にタルカットとダッドレーが日本に着いた時には高札が撤去されていました。とても幸運であったと言えます。二人は会衆派の伝道拠点である神戸を目指しました。彼女たちを迎えたのは神戸教会の設立に力を注いだD・C・グリーン宣教師です。タルカットとダッドレーは神戸の宇治野という村に作られた英語学校を手伝い、その数カ月後に神戸の花隈に私塾を開設しました。

そして、この私塾を発展させて1875年10月12日、神戸市の山本通（異人館で有名な北野町の西に位置する）に「女学校」（ガールズ・スクール）を創立しました。寄宿舎付きの建物であったので、「神戸ホーム」とも呼ばれました。これが今日の神戸女学院であり、この日を創立記念日としています。ちなみに同志社は同じ年の11月29日が創立記念日ですからほぼ同時期です。神戸女学院と同志社は2025年に共に創立150周年を迎えます。

タルカットにみる会衆派スピリット

神戸女学院の創立者の一人、イライザ・タルカットについてもう少し詳しく紹介します。タルカットは、1836年5月22日、アメリカの東部コネティカット州ヴァーノン・ロックビルという町で誕生しました。両親は会衆派教会に通うキリスト者であり、幼い時から会衆派の精神を肌で感じていました。大学を出て教員をするなどの仕事をしていたが、1872年にアメリカン・ボードから派遣された宣教師の帰国報告を聴き、自らも宣教師になることを志願したのです。36歳の彼女が見知らぬ日本という国に行く決意をしたのは、これが神からの呼びかけに対する応答であると理解したからでしょう。タルカットはピューリタン、そして会衆派に受け継がれてきたスピリットを体現した人であったと思います。彼女は現場から求められると直ちに行動するという姿勢を貫きました。

タルカットは先に述べたように1873年に来日して神戸女学院を創立しましたが、彼女はずっと神戸女学院にいたわけではありません。キリスト教の伝道の担い手が求められると、神戸女学院の教育事業を他の宣教師に託してその現場に赴いていきました。1879年には岡山でのキリスト教伝道の手伝いをしています。1882年には再び神戸女学院に要請されて校長代行をしましたが、その役割を終えると再び岡山、さらに京都、広島、ハワイなどに出かけていき伝道活動に従事したのです。その他にも石井十次が岡山孤児院を創立した時には尽力し、鳥取英和女学校を設立し、京都看病婦学校にも着任するなど、その働きの多さには驚きを禁じ得ません。

タルカットは1911年に日本で亡くなり、神戸市外国人墓地に埋葬されました。日本のキリスト教伝道、女子教育のために身を献げた彼女は文字通り日本に骨を埋めることになったのです。墓碑には“WELL DONE GOOD AND FAITHFUL SERVANT ENTER THOU INTO THE JOY OF THY LORD”（「忠実な良い僕だ。よくやった。主人と一緒に喜んでくれ。」）と刻まれています。これは新約聖書のマタイによる福音書25章21節の言葉です。この箇所では神から与えられている才能（タラントン）を豊かに用いることの大切さが教えられています。タルカットは十二分に自分のタラントを用いて、神に応答した人生を終えたのでありました。

愛神愛隣

神戸女学院には学院永久標語というものがあります。「愛神愛隣」という言葉です。新約聖書のマタイによる福音書22章34～40節が基になっています。ファリサイ派の人々がイエスに「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」と尋ねると、イエスは「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』」と答えられました。聖書全体を通じて最も重要な掟は、神を愛し、隣人を愛することであり、これを縮めて「愛神愛隣」としています。

神を愛するというのは、神が望まれていることは何であるかと問い、そこで示された使命を実践することだと思えます。神が何を望まれているのかを知るためには、聖書を読むことが重要です。プロテスタントの原則に従って「聖書のみ」が神を示す根拠でありますから、熱心に聖書を読むことが求められるのです。

隣人を愛するというのも、隣人が何を望んでいるかを考えることから始まります。その際の「隣人」は自分の隣りや近くにいる人だけを指すわけではありません。聖書におけるイエスの言葉によると、隣人は全ての人が対象となります。たとえ出会ったことの無い人々であっても、彼らの「隣人になる」ことが求められているのです。アメリカン・ボードの宣教師たちは日本人の「隣人」になるために日本にやってきました。自ら深く聖書を読み、祈りつつ神の御心を尋ね求め、神へ応答した人々がいたおかげで神戸女学院は創立されたのです。そのことを憶えながら、次は我々が宣教師の後に続いていくのだ、という決意をもって「愛神愛隣」という標語を日頃から意識するように努めています。

会衆派スピリットを継承する教育

同志社も神戸女学院も会衆派教会と関係する学校であり、そのスピリットが継承されてきました。そのスピリットは教育の土台にも据えられています。

同志社大学のウェブサイトには、「同志社のキリスト教教育」として、「精神と品行を陶冶する活力を身につけ、知識の修得だけでなく、良心の涵養を促す」とあります。そして、「創立

者新島襄は、周りに流されるのではなく、自分なりに正しい考え方を持ち、変革を自ら実行する人物を育成しようと考えました。また、このような『一国の良心』となる人物は『キリスト教主義』によって育まれると信じ、キリスト教主義に基づく教育を同志社の基本的な方針として実践してきました」と明示されています。

神戸女学院大学のウェブサイトにあるミッションステートメントは、「学ぶ者と働く者が共に学院標語『愛神愛隣』に基づくキリスト教の精神を分かち合い、時代の潮流に流されることなく、置かれた場で、利害を超え、自らの役割を感知し、果たし、人にとって真に大切なものを見分ける、共感性の高い人格への成長を目指します」というものです。

各大学によっての表現の違いはありますが、両者に共通点が見られることがお分かりでしょう。特に、周りや時代に流されるのではなく「自分」で考えることが求められています。もちろんこれは自分本位でわがままに生きていくということではありません。神から委託されることへの応答を自分で考え、生活の場において自らが実行するということです。まさに会衆派教会のスピリットが教育の方針に受け継がれているのです。

おわりに

同志社も神戸女学院も、会衆派教会のスピリットを受け継いできた大学です。「スピリット」というのは目に見えないものであり、言語化しにくい内容も含んでいます。けれども、お話しさせていただいたことを通じて会衆派のスピリットが何であるかを皆さんなりに掴んでいただければ幸いです。地上の権威に縛られず、個人として神の言葉を聞き、その言葉に応答して生きる。私自身も同志社に学んだ者として、会衆派教会のスピリットをあらためて心に刻み、神の望まれていることを感知し、神に喜ばれる人格となることを目標として自ら変革し続けていきたいと願っています。

2019年6月5日 同志社スピリット・ウィーク春学期

今出川校地 「講演」記録